

「世界に目を向けよう～今、私たちにできること～」 実行委員会の紹介

●代表 金子 玲子 / 三浦 直行 / 阿部 史朗

●目的 ・世界に目を向け、自己と世界との関わりについて考えるきっかけづくり。
 ・より良い社会づくり、未来づくりのために、今、自分たちのできることを考える。

「世界に目を向けよう～今、私たちにできること～」のあゆみ

1992	ネパールへ現状を視察に行く(金子)	★: イベント開催
1993	★①浦和コルソ、蓮田で写真展(男バス他)	
1994	★②浦和東電ホール(選択教科ワールドスタディーズ・生徒会他)	
1995～96	★③★④浦和市立尾間木公民館(卒業生+在校生)	
1997～98	★⑤★⑥浦和市プラザイースト(英語部+卒業生+在校生)	
1999～2000	★⑦★⑧浦和市プラザイースト(英語部+卒業生+在校生+保護者)	
2001	★⑨さいたま市プラザイースト(生徒会+卒業生+在校生) 毎月第三土曜日に、尾間木公民館にて学習会を始める。	
2002	さいたま市国際交流協会に加盟する。 ★⑩さいたま市プラザイースト(生徒会+卒業生+在校生)	
2003	★⑪さいたま市プラザイースト(生徒会+卒業生+在校生+ボランティア) 学習会実施を毎月第一・第三土曜日に変更 さいたま市立尾間木公民館文化祭 さいたま市国際交流協会・ボランティア養成講座講演(市民会館うらわ)	 ロゴ作成
2004	★⑫さいたま市プラザイースト(生徒会+卒業生+在校生+ボランティア) 尾間木地区文化祭参加(尾間木公民館)	
2005	さいたま市国際NGOネットワークに加盟 日本国際理解教育学会第15回研究大会にて活動報告 ★⑬さいたま市プラザイースト(在校生+卒業生+ボランティア) さいたま国際わくわくフェスタ(桜木小学校) ユース国際ボランティア養成講座にて活動報告 ユニセフ ハンド・イン・ハンドに参加	
2006	さいたま市国際交流協会研修会に参加 さいたま市国際NGOネットワーク総会に参加 ★⑭さいたま市プラザイースト(生徒会+卒業生+在校生+ボランティア) CVSGスタディーツアー参加者よりカンボジアでの体験報告を聞く 尾間木地区文化祭に参加(尾間木公民館)	
2007	埼玉新英語教育研究会にて活動報告(仲本公民館) ★⑮さいたま市プラザイースト(生徒会+在校生+卒業生+ボランティア) 尾間木地区文化祭に参加(尾間木公民館) 会則制定 持続可能な開発のための教育の10年と市民学習にて活動報告(和光市中央公民館) 平成19年度「彩の国国際貢献賞」受賞	
2008	さいたま市国際教育「世界の学び方」研修会で発表 カンボジア視察(金子) カンボジアに海外ボランティア 国連軍縮会議に参加 さいたま市民ミーティングで報告 ★⑯さいたま市プラザイースト(生徒会+在校生+卒業生+ボランティア) 尾間木地区文化祭に参加 ユニセフ ハンド・イン・ハンドボランティアに参加	■ 定期学習会は、毎月第一・第三土曜日の夜6時から9時まで、尾間木公民館で行っています。
2009	雑誌「あけぼの」にて活動事例発表(三浦) ★⑰さいたま市プラザイースト(生徒会+在校生+卒業生+ボランティア) あしながPウォーク参加 尾間木地区文化祭に参加	
2010	開発教育全国大会にて実践発表 ★⑱さいたま市プラザイースト(生徒会+在校生+卒業生+ボランティア) 尾間木地区文化祭に参加	
2011	★⑲さいたま市プラザイースト(生徒会+在校生+卒業生+ボランティア) 石巻にビデオレターを届ける 尾間木地区文化祭に参加 ユニセフボランティアに参加	
2012	わくわく国際フェスタに参加 アイセック・教育同人社「リアル熟議」で発表(池袋アウルタワー) 埼玉新英語教育研究会にて活動報告(浦和コムナーレ) アウシュビッツに平和メッセージを届ける ★⑳さいたま市プラザイースト(生徒会+在校生+卒業生+ボランティア)	

●活動

当会は上記の目的に基づき、「世界を知ろう」「海を越えての交流」「身近にできる国際支援」という三本の柱を掲げて活動している。「私たちにできること」とは、まず、世界を知ること。そして、その知識をより多くの人と共有し、共に考え、個々人の意識を高めること。そうした中で、自分たちにできることはないか考え、身近なところから行動することである。

そのような理念のもと、2001年9月から行っている定期学習会では、個々人の調査資料や考えを持ち寄り、また学習教材に取り組んだりしながら、知識の共有と考えの深化を試みている。また、「向き合っ、つながって、世界へ」をコンセプトに、ゲストティーチャーを招いての熟議なども行い、世代を超えたコミュニケーションも魅力の一つとなっている。また、現在まで20年にわたって年一回行ってきたイベント発表は、学習してきた内容を会の中だけで終わらせるのではなく地域にうたえることで、知識をより多くの人と共有し、共に考えていきたいという思いから行っている。